

鹿児島の地質37

地球環境を守る岩石・石灰岩

地質担当 坂本 昌弥

鹿児島県の喜界島・沖永良部島・与論島は石灰岩によって形成されています。この岩石は、沖永良部島では昇竜洞という鍾乳洞（しようにゅうどう）やフーチャという風光明媚（ふうこうめいび）な地形も作っています。



フーチャ（潮吹き洞窟）
（和泊町北海岸）

地球に海ができた約40億年前、大気中には二酸化炭素が約96%も含まれていました。これは今の金星の大気組成とほとんど一緒だったと考えられています。

金星は二酸化炭素による温室効果によって平均気温は464℃もあります。とても生物が生きていくことはできない環境ですね。この金星の研究から40億年前の地球の平均気温も非常に高いものだっただろうと推定されています。しかし現在、地球の大気に占める二酸化炭素の量は約0.035%，そして平均気温は

約15℃といわれています。いったい地球の大気中にあった膨大な二酸化炭素はどこへ行ってしまったのでしょうか？

その答えは石灰岩にあります。大気中に大



鍾乳石
（知名町昇竜洞）

量に含まれていた二酸化炭素は、海に溶け込みます。この溶け込んだ二酸化炭素をサンゴやフズリナといった微小な動物が取り込み、固い殻を

作り、やがてその殻は岩石になりました。これが石灰岩です。いったん岩石になってしまうと、取り込んだ二酸化炭素はもう大気中に放出されることはありません。硬い岩石になったまま地中に眠り続けることになります。

南の海に生きているサンゴは、大気中の二酸化炭素を減少させ、生物に適した環境を作り出してくれる大切なものだったのですね。

鹿児島の植物52

奄美大島の春

館長 水流 芳則

日本で5番目の世界自然遺産登録を目指している奄美大島での3月末の植物を見てみましょう。



オヒルギ

住用川河口に広がるマングローブ林では、分布の北限となるオヒルギが赤い萼片の胎生種子を形成しはじめているところでした。マングローブ林を形成するも

う一つ種であるメヒルギは、緑の萼片で多くの胎生種子を形成しており、もうすぐ落下しそうなものもありました。マングローブの後背地にはサキシマスオウノキの群落があり、ウルトラマンの顔に似た果実を多く拾いました。また、これから咲き始めるイルカンドの花を運良く見つけました。これからまだ伸びるであろう花芽を多く付けていました。

亜熱帯降雨林である山間部の林道沿いには、淡桃色から白色をしたツツジ科のサクラツツジが満開を迎えていました。また、リュ

ウキュウバライチゴは赤い実と同時に白い花を咲かせていました。林床には、奄美固有種のアマミエビネの清楚な姿を発見しました。



アマミエビネ

白や淡桃色の花がすこしうつむき加減に開いています。35年前最初に見たときは、林床一面、咲き乱れていたことを思い出し、盗掘による減少に心が痛みました。

林道は、奄美豪雨災害の傷跡が至る所に見られました。これから、数年で先駆

植物に覆われ徐々に森林が回復することでしょう。本土に比べるとその再生力が強いのも亜熱帯降雨林の特徴です。

民家の庭先には、海岸の琉球石灰岩上に見られるバラ科のテンノウメの白い花が咲き始め、奄美固有種のツツジ科アマミセイシカの淡い黄色の花、アマミアセビの白い花などが咲いていました。道路脇にもリュウキュウコスミレやオキナワチドリが紫色の花を咲かせて春を感じさせてくれました。